

2019 年 12 月 15 日（日）「血の畑」

マタイ 27:1-10

1 さて、夜が明けると、祭司長、民の長老たち全員は、イエスを死刑にするために協議した。
2 それから、イエスを縛って連れ出し、総督ピラトに引き渡した。
3 そのとき、イエスを売ったユダは、イエスが罪に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を、祭司長、長老たちに返して、4 「私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして」と言った。しかし、彼らは、「私たちの知ったことか。自分で始末することだ」と言った。5 それで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして、外に出て行って、首をつった。6 祭司長たちは銀貨を取って、「これを神殿の金庫に入れるのはよくない。血の代価だから」と言った。7 彼らは相談して、その金で陶器師の畑を買い、旅人たちの墓地にした。8 それで、その畑は、今でも血の畑と呼ばれている。9 そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。「彼らは銀貨三十枚を取った。イスラエルの人々に値積もりされた人の値段である。10 彼らは、主が私にお命じになったように、その金を払って、陶器師の畑を買った。」

【序論】

「聖書は信じる神のことばなのか」。そこに綴られたメッセージは、どういう意味で読者にとっての救いとなるのか。聖書という書物は、自分の母国語で読めば、ある程度は何を言っているのかが分かるものです。しかし、書かれた当時の社会的・文化的・地域的・時代的背景を理解しなくては、十分に分かるものではありません。説教者は信徒の皆様と共に神の知恵の深みに漕ぎ出していくため、御言葉を学んでいます。今日の箇所も、ここで引用されている旧約聖書の預言を理解するときに、驚くべき真理と出会うことになるでしょう。

【本論】

今日から 27 章に入ります。主イエスの受難もクライマックスに向かっていますが、ローマ総督ピラトによる十字架裁判を前に、イスカリオテ・ユダの最期を見ます。ストーリー展開の流れを遮るように挿入されたパラグラフですが、著者の目的としては、26 章におけるペテロの挫折と本章のユダの転落とを対比させようとしているのでしょう。

本論 1. ローマ人に罪をなすりつけるユダヤ人

さて、夜が明けると、祭司長、民の長老たち全員は、イエスを死刑にするために協議した。

それから、イエスを縛って連れ出し、総督ピラトに引き渡した。(27:1-2)

まず「夜が明けると」とありますように、大祭司カヤパの邸宅での非公式な裁判が一晩かけて行なわれたことが分かります。サンヘドリンは夜間には公式の会合をもつことができませんでしたから、朝になった段階で正式な裁判が行なわれることになったのです。とはいえ、これは夜中に出された決定を確認する「形ばかりのもの」だったでしょう。どの福音書も、このユダヤの公式裁判に関しては極めて短い情報しか残しておりません(マルコ 15:1、ルカ 23:1、ヨハネ 18:28)。当時のユダヤでは自由に死刑を執行することが許されておらず、ローマ総督の命令によってのみ科することができたようです。

そこでピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、自分たちの律法に従ってさばきなさい。」ユダヤ人たちは彼に言った。「私たちには、だれを死刑にすることも許されてはいません。」(ヨハネ 18:31)

ただ例外もあったようで、異邦人が神殿の聖所に侵入した場合には、帝国の許可を必要としなかったとも言われています。いずれにせよ、ユダヤ教最高議会はイエスの処刑を帝国の手に委ねようとしています。ここには彼らの魂胆が隠されているように感じられる。ユダヤ人自ら手を下すことなく、異邦人の手でキリストを殺そうという「責任転嫁」です。彼らが十字架刑にこだわるところには、憎きイエスのあらゆる尊厳を奪い、できる限りの苦しみに遭わせようという意図もあるのかもしれませんが。しかし、根っこのところでは、自分たちの裁判が不当であることを知っており、罪なき者の血を流す責任を負いたくないという思いがあるのでしょう。彼らは主イエスを冒瀆罪で死刑に決めました。しかし、ローマの法律では冒瀆罪は死刑の理由にならないため、どうにかして社会的な騒乱罪が認められるよう、話の持って行き方を検討したのだと思われます。自らをメシヤだと主張し全世界の統治を夢見る危険な人物として、イエスを帝国に訴えたのです。

ここに登場するピラトは、紀元 26-36 年にサマリヤとイドマヤを含むユダヤ地方を治めた五代目の総督です。総督には、軍事力によってその地方の秩序を保ち、植民地から税金を徴収して帝国に納めさせ、裁判を実施するなどの責任がありました。ただ、このピラトという男は、賄賂を取ったり、裁判なしに処刑したり、腐敗に満ちた政治を行っていたと言われます。彼はユダヤ人を忌み嫌い、ユダヤ宗教を冒瀆するような事件を度々興しては騒動を巻き起こしていました。

本論 2. 恵みを知らなかったユダの末路

さて、続く 3～10 節にはイスカリオテ・ユダの最期の様子が描かれています。この記事はマタイ福音書にしか記録されていません。

そのとき、イエスを売ったユダは、イエスが罪に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を、祭司長、長老たちに返して、「私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして」と言った。しかし、彼らは、「私たちの知ったことか。自分で始末することだ」と言った。

(27:3-4)

この記事は、時間的にピラトが十字架刑の判決を下した後の出来事だと思われます。おそらく、ユダは主イエスが十字架刑になるとは思っていなかったのでしょう。このような顛末に青ざめ、今更のように自分の犯した罪の重さを実感したのです。ここで敢えて「悔い改め」(μετανοέω)ではなく「後悔」(μεταμέλομαι)という言葉が使われているのは意味深長です。「悔い改め」は、自分の過去の罪を憎み、意思を変え、全き方向転換を表す言葉であるのに対し、「後悔」は方向転換なしに過去を悔い、くよくよするばかりの言葉です。「後悔は、宗教的感情の中でもいちばん無益なものだし、悔い改めとよく混同されるが、実はほとんど反対のもの」(ユージン・ピーターソン)。

ユダは主イエスを裏切るに際して祭司長たちから受け取った銀貨30枚を返しに行きました。この行動は一見正しいように見えるでしょう。しかし、この行動には彼の根本的な誤りが現れていると思われます。ユダは主イエスの処刑が決まった時に、まずどこへ行かなければならなかったでしょうか。それは祭司長たちのところではなく、主イエスご自身の許だったのではないか。主に赦しを乞い、自分のすべての罪を告白することではなかったでしょうか。しかし、彼は真っ先に金を返しに行った。これは結局のところ、自分で自分の罪を処理しようとしていることの表れと言えないだろうか。そして、「汚れた金」に象徴される自分の罪を祭司長たちに押し付けることで、責任転嫁をしようとしているようにも見えます。ユダは最後まで主イエスの恵みを知らなかったのです。依り頼むべきところを間違えたのです。彼が足を運んだ祭司長たちの許には神の赦しの恵みはないのですから。その証拠に、彼らは「私たちの知ったことか。自分で始末することだ」と言って金を突き返します。ここには「イエスの血の責任はお前にある」と言い合う人間の醜い姿が表されているでしょう。

それで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして、外に出て行って、首をつった。

(27:5)

これが「赦し」を知らなかった者の悲しい最期でした。ユダは帰る場所を失ってしまったのです。十二弟子の許にも、ユダヤ教にも戻るができなくなった。この世に居場

所を失った彼は、自害するという道を選択しました。しかし、本当にそれ以外に道はなかったのか。主イエスの十字架の下に走ったならば、彼は赦されたのではないか。

本論 3. 人の罪が結果として新しい契約に至る

祭司長たちは銀貨を取って、「これを神殿の金庫に入れるのはよくない。血の代価だから」と言った。彼らは相談して、その金で陶器師の畑を買い、旅人たちの墓地にした。それで、その畑は、今でも血の畑と呼ばれている。(27:6-8)

この後に及んで、尚も祭司長たちは「汚れた金」を受け取るのを拒み続けます。戻ってきた金が「汚れている」と判断するということは、自分たちが主イエスをユダに売った行為そのものが「汚れている」と言っているに等しいでしょう。正しいことをしたのであれば、その金は清いのですから。そして、彼らが内々に話し合っただけで決めたことは、陶器師の畑を買って、旅人（異邦人）の墓地にするということでした。「陶器師の畑」とは、元々陶器師が粘土採掘のために所有していた土地のことでしょう。「畑」と言っても、必ずしも「農作物」を育てていたわけではありません。

使徒 1:19 にはこの土地が「アケルダマ」（血の地所）と呼ばれたと書かれていますが、エレミヤ 19:6 ではこの土地の存在する「ベン・ヒノムの谷」が「虐殺の谷」と呼ばれており、この預言が皮肉にも地理的正確さにおいて成就しているのを見ます。

ところで、彼らはどうしてこの土地を異邦人の墓地としたのでしょうか。それは、ユダヤ人にとって異邦人とは「汚れた存在」でありましたから、「汚れた金」によって購入した土地の用途としてはそれが適していたからです。彼らは尚も自らを「清く」保とうとしている。どうにか汚れを身に負うまいとして、逃げ道をつくろうとする。しかし、この異邦人に対する差別視こそ神の御前には「汚れた思い」ではないか。彼らがやっていることは、偏に汚れに汚れを重ねる行為にほかならないのです。

そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。「彼らは銀貨三十枚を取った。イスラエルの人々に値積もりされた人の値段である。彼らは、主が私にお命じになったように、その金を払って、陶器師の畑を買った。」(27:9-10)

さて、「～の預言が成就した」という言い回しはマタイの常套句で、旧約聖書をよく知っているユダヤ人に「イエスこそ来るべき^{きた}メシヤである」ことを悟らせようとする表現です（本書で 13 回目）。ここで引用されている聖句は、実は正確な旧約聖書の御言葉ではなく、幾つかの箇所が混合されたものです。そのような引用の仕方は、現代の私たちの常識から考えるとあり得ないのですが、当時のユダヤ人は旧約聖書の出来事を再解釈し、自分たちの身近に起きた出来事をそれによって説明する習慣をもっていました。

最も関連の深い箇所は、ゼカリヤ 11:12-13 でしょう。

私は彼らに言った。「あなたがたがよいと思うなら、私に賃金を払いなさい。もし、そうでないなら、やめなさい。」すると彼らは、私の賃金として、銀三十シェケルを量った。主は私に仰せられた。「彼らによってわたしが値積もりされた尊い価を、陶器師に投げ与えよ。」

そこで、私は銀三十を取り、それを主の宮の陶器師に投げ与えた。

預言者ゼカリヤは、外国の圧政の下にあるイスラエル民族の「牧者」となるよう召された人でしたが、その働きへの報酬を求めたところ、賃金として銀 30 シェケルが与えられたということです。「銀 30 シェケル」とは、奴隷一人分の値段でしたから、これは預言者を如何に軽く扱っているかを表す民の態度です。神様はそのような民の態度に幻滅し（預言者が軽んじられるということは、彼を派遣した神ご自身が軽んじられるということ）、「彼らによってわたしが値積もりされた尊い価」と皮肉を言い、それを「主の宮の陶器師」に投げ与えよとお命じになったのです。この出来事は、主イエスが銀貨 30 枚で売られ、その金で陶器師の畑が買い取られたという出来事と、気味が悪いほど一致しています。

もう一つの関連箇所は、エレミヤ 32:6-9 でしょう。

エレミヤは言った。「私に、このような主のことばがあつた。『見よ。あなたのおじシャルムの子ハナムエルが、あなたのところに来て、「アナトテにある畑を買ってくれ。あなたには買い戻す権利があるのだから」と言う。』すると、主のことばのとおり、おじの子ハナムエルが私のところ、監視の庭に来て、私に言った。『どうか、ベニヤミンの地のアナトテにある私の畑を買ってください。あなたには所有権もあり、買い戻す権利もありますから、あなたが買い取ってください。』私は、これが主のことばであると知った。そこで私は、おじの子ハナムエルから、アナトテにある畑を買い取り、彼に銀十七シェケルを払った。

ここでは、預言者エレミヤが、ユダの地がバビロニア帝国に包囲されている時に、敵方の手に陥っている「アナトテの土地」を敢えて買うよう、神から命ぜられた出来事を描いています。自分の手に入ることはまず望めない土地のために高いお金を支払う。こんな無駄なことをなぜしなくてはならないのか。しかし、神はエレミヤに約束なさいます。あなたが手に入れるその土地は、やがて捕囚が終わった日に帰ってくる「残りの者」にとっての物的保証になる。神と人との「新しい契約」が結ばれることの目に見える証拠となるのだ。

「血の畑」と呼ばれる土地がやがて「祝福の土地」になるということを、マタイはこれらの箇所を引用することで読者に伝えようとしている。主イエスの血が流された土地。そこに神と人との新しい契約が結ばれる。呪いは祝福に変わるのです。

【結論】

神の救いの御業は、人間の罪が折り重なりながら実現していきます。主イエスを裏切った者、汚れた金で取り引きした者の罪はもちろん審かれることになるでしょう。しかし、それらの汚れに汚れた人間の行ないが、神の聖なるご計画を実現していく。聖書は一貫してその「深遠なる神の知恵」を伝えているのです。この神の知恵は何のために用いられたか。それは、私たちの救いのためではありませんか。私たちと「新しい契約」を結ぶために、主イエスは地に落ちました。一粒の麦として、「血の畑」にご自身のいのちを植えられたのです。そのいのちを受け取る者、恵みに留まる者を、神は今も探し求めておられます。

【祈り】

叡智に富み給う神よ。ユダと祭司長らが「汚れた金」の押し付け合いをしているところには、私たち人間の誰もが陥る「責任転嫁」の罪が現れております。私たちも彼らの行ないと無関係ではないことを知ります。主よ、私たちを憐れんでください。しかし、人間の罪が折り重なり合いながら、最終的に「血の畑」が「祝福の土地」に変えられる不思議を見ました。不当な裁判で殺された主イエスの十字架は地に立てられ、それが神と人との間の契約のしるしとなったのです。私たちの希望はただ主にあります。あなたの測り知れない救いの御業を誉め讃えます。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
不思議なる叡智をもって、救いの御業を完成に至らせ給う、父なる神の愛。
一粒の麦として地に落ち、血の畑を祝福の土地となし給う、主イエス・キリストの恵み。
罪あるすべての者を、神との契約の下に導き入れ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。